生き方・いろいろ・ゆたかな人生

まなこ

男女共同参画 from むさしの

88

2013 Aug.

特集 わたしにとっての社会と暮らし

男女共同参画フォーラムより

記念講演会・講座・座談会など…… P2~P4

◎子どもとふれ合うことで、新たな自分を発見……P5

◎消防団に入団して、日々の暮らしが豊かに……P5

企画・発行　武蔵野市 市民部 市民活動推進課　男女共同参画担当

特集 わたしにとっての社会と暮らし

地域社会とのかかわり方は人によって異なります。それぞれが自分らしくいられる暮らし方を考えることで、共に築いていける社会のあり方が見えてくるのではないでしょうか。
6月23日から始まった「男女共同参画週間」に合わせ、市民や各団体で構成した実行委員会と共催で男女共同参画フォーラム「わたしらしく暮らす・働く そしてはじまる…」を開催し、多くの方にご来場いただきました。記念講演会・講座・座談会などの様子を紹介します。

『男女共同参画フォーラム』より

記念講演会 わたしらしく暮らす・働く

働く女性を応援する雑誌『日経ウーマン』に長年かかわりながら、社会の流れを見てきた麓幸子さんに、今の日本の現状やこれからの女性の社会参画の在り方などをテーマにお話していただきました。

麓幸子（ふもと さちこ）さん
日経BP社ビスライフ局長。日経ウーマン発行人。元『日経ウーマン』編集長。筑波大学非常勤講師。法政大学大学院修士課程在籍。武蔵野市在住。著書に『就活生の親が今、知っておくべきこと』（日本経済新聞出版社）他。

『日経ウーマン』は25年前の1988年に創刊しました。その2年前、男女雇用機会均等法ができ、女性が働くことを国が応援していくという風が吹き始めたときに、『日経ウーマン』が生まれたわけです。私は26歳で、その創刊に携わることになりました。

当時の私は今でいうところの〝おひとり様〟志向が強く、人生を仕事にささげようと思っていました。でも、実際には大学を出てすぐに結婚。20代で長男、長女を出産しました。長女の出産を機に、別の部署への異動命令を受け、『日経ウーマン』には強い思い入れがありましたので、不本意な思いを経験したこともあります。

異動先はクライアントからお金を頂戴して印刷物をつくる部署でした。記者とは異なる仕事が多く、最初は本当に大変でした。ただ、振り返って見れば、お客様からお金を頂くという経験から得た学びは大きかったですね。今では「不本意な異動ほど良かったものはない」と感じています。全ての経験に無駄はありません。もし、今の仕事が不本意だと感じている方がいたら、その思いは横に置き、「自分の才能や能力を伸ばすチャンスかもしれない」と思っていただけるといいと思います。

今、私が国や企業に最も取り組んでいただきたいのは、出産にかかわる職場復帰後の〝仕事と家庭の両立支援〟の確立です。安倍総理は育児休業3年と掲げていますが、育児休業取得者としては、本当に必要なのは期間の長さではないと考えています。

実際、3年間も職場を離れることは、女性にとっても企業にとっても大きなロスになります。さらに、家庭の中の男女共同参画も進まなくなります。職場の男女共同参画と同時に、男性の家庭への進出も進めることが真の男女共同参画の推進ではないでしょうか。ある企業の調査でも、女性の一番の要望は「復帰後の働きやすい制度の確立」でした。まだまだ国や企業のトップ側にニーズの読み違えがあるのではないかと感じています。

とはいえ、今の女性が迎えている現状は追い風がきています。国が「指導的地位に占める女性の割合を2020年までに30％にする」と約束したことも大きいですね。

また、若い男性たちの意識がすでに「妻と共に働き、共に子どもを育てる」に変化していることも見逃せません。雇用形態が以前とは違ってきているせいもあるかもしれませんが、今の男性が求めるのは、「家庭に入る女性」ではなく、「職を持っている自立した女性」に変わってきているようです。

その一方で、チャンスは目の前にあるのに、一歩踏み出せない女性たちが増えています。それは意識のあり方に問題があるようです。海外の女性は非常におおらかな気持ちで自分自身を肯定しています。しかし、日本の女性は自尊心が低い傾向があり、一生懸命やっていても「まだできていない」と思いがちです。他人の目から見たらできていることはたくさんあるはずです。日本女性はもっと自分自身を認めてあげる必要がありますね。

多くの女性が下積み経験をあまり好まないのもチャンスを逃している要因の一つです。社会で活躍している女性たちの誰もが、最初はコピー取りやメールの仕分けというような一見雑用と思える仕事を経て大成しています。下積みを嫌っている人にチャンスがくることはありません。どんな仕事も断らずにやってみることが大切です。

最近では、キャリアという言葉の使い方も変わり、生き方そのものをライフ・キャリアと捉えるようになりました。主婦の方々はよく「私には経験がない」と言われますが、そうではありません。家事や育児、介護なども社会で通用する立派なキャリアになります。まずは自分のできることを見つめ直し、自信を持って人生に向きあっていただきたいと思います。

人生は何かを選択することの繰り返しです。社会の制度はもう整ってきているので、これからは女性たちが自らの選択に責任を持って踏み出しさえすれば、たくさんの可能性を開くことができると確信しています。

［取材・文　詩水淳子］

『まなこ』ちょこっとトーク

社会とかかわる 最初の一歩を見つけませんか

創刊から20年余りの歴史を持つ、武蔵野市男女共同参画情報誌『まなこ』。そのかつての編集長、現編集委員、サポーターをパネリストに迎えたトークイベントが開催されました。様々な悩みや気持ちが次々とあふれ出るなかから、それぞれの“社会への壁”について抜粋しレポートします。

詩水さん　5人の皆さんは、『まなこ』を含め、仕事やボランティアなど様々な活動をされていますが、その活動を始めた際感じた〝壁〟がありましたら教えてください。

作部さん　さまざまな〝壁〟がありましたが、自分のなかにある〝壁〟が一番、大きかったと思います。自分のなかで内面化されたジェンダーバイアス（社会的・文化的な性に関わる偏見）から自由になるのは非常にむずかしく、家事育児が自分の役割という意識が今もあります。自分のなかの〝壁〟を乗り越えることも社会に出ていくには必要ではないでしょうか。

丸山さん　私は社会で自分に何かできることがあればしたいという強い気持ちがありますが、それが何かわからないんです。それに、子どもや家族との時間を大切にしたいという気持ちがあるので、自分がやりたいこととその時間の折り合いがつかないこと、これが今の私にとって壁になっているかもしれません。

粟澤さん　4歳と2歳の子どもの育児中心の生活をしています。子育て中の私の周りの友達は、皆さん家事と育児に120％の力を注いでいて、しかも趣味やボランティアなどの活動にも積極的です。そんな彼女たちを見ていて、自分も子どもが小さいことを理由に家に閉じこもっていてはいけないと思い、『まなこ』サポーターという形で一歩を踏み出すことにしました。『まなこ』の活動をとおして、どんどん自分の幅を広げていければいいなと思っています。

杉田さん　私自身、語学が好きなので資格を取得してよりステップアップしたいという気持ちはありますが、一方で、自分のなかにそれを活かしきれないのではないかと思う性格的な悩みがあって、それを壁に感じることはありますね。

藤原さん　私は産後すぐにイラストレーターに転身する道を選びました。壁はおそらくたくさんあったと思いますが、目の前のやるべきことが多すぎて、強行突破してきたように思います。そのなかで言えることは、自分が動かないと何も始まらないし、何も見えないのだということです。おそらく、今、様々な環境のなかで、社会への〝その一歩が踏み出せない〟と悩んでいる人が大勢いると思うのですが、私は〝家を出ればそこは社会〟だと思うんです。難しく考えず、一歩外に出て誰かと会って話をすれば、それはすでに社会とかかわっているということなのではないでしょうか。

詩水さん　私たちは、社会とのかかわりとは何かというイメージを勝手に作りだし〝壁〟だと思っているのかもしれませんね。でも、周囲の無理解など〝壁〟があるのも現実です。そういうなかで、悩みながらも一歩踏みだそうとしている方々が、読むだけで前向きな気持ちになれるような『まなこ』をみんなでつくっていきたいですね。

［文　関口直子］

6月28日、武蔵野プレイスギャラリーにて開催
左から詩水さん、作部さん、丸山さん、杉田さん、粟澤さん、藤原さん

●パネリストプロフィール

詩水淳子さん（40代 吉祥寺北町在住）
現「まなこ」編集委員。ライター。「まなこ」編集にかかわってきた3年間で、男女共同参画に対する意識も高まる

作部径子さん（40代 吉祥寺東町在住）
元「まなこ」編集長。現在は都内男女共同参画センター勤務のかたわら、大学院で女性学を学ぶ

丸山麻帆さん（30代 吉祥寺北町在住）
現「まなこ」編集委員。前「まなこ」レポーター。男女共同参画については日々勉強中

杉田真奈美さん（40代 吉祥寺本町在住）
現「まなこ」編集委員。編集職の経験を活かし「まなこ」編集に携わる

粟澤のり子さん（30代 吉祥寺本町在住）
現「まなこ」サポーター。幼い子どもを抱えるなか、社会とのかかわりとは何かを模索中

藤原理和さん（40代 杉並区在住）
前「まなこ」編集委員。イラストレーター。昨年から表紙イラストも手がける

特集 わたしにとっての社会と暮らし

講座 「メディアの中の男女」と批判的につき合うために

―メディア・リテラシー論の観点から―

成蹊大学文学部現代社会学科 教授
見城武秀（けんじょう）さん

メディア・リテラシーとは何か、メディアを通じて流されるメッセージからどんな意味を読み取ることができるのかを見城先生がわかりやすく解説してくださいました。

メディア・リテラシーとは、「メディア」（新聞、TV、インターネットなど）と「リテラシー」（読み書き能力）の複合語で、「メディアの情報を批判的に解釈し、意味を読みとる能力」と「メディアを通じて、情報を発信して人に伝える能力」の両方が含まれています。

1975年のCM「私作る人、僕食べる人」[※1]と、最近のNHKドラマ『純と愛』[※2]を比べると、この40年弱の間に、メディアの中で描かれる男女の関係は大きく変わったように見えます。しかし、『純と愛』の主人公たちが「普通の男女」として描かれていない点に着目すると、この間、「標準的な男女関係に関する社会のイメージ」はそれほど変化していないとも言えます。

メディア・リテラシーはメディアについて「正しい」評価をくだせる能力であり、メディアの悪影響から受け手を保護するのに役立つのだという考え方があります。

しかし、メディア・リテラシーには別の側面があります。それは、ふだん意識していないメディアの表現上の約束事やメッセージの背後にある文脈をあえて意識することで、自分とメディアの関係を鏡に映すように反省的に捉え直す作業としての側面です。「自分が当たり前だと思っていること」を「本当に当たり前なのか」と問い直していく作業と言ってもいいかもしれません。［文　杉田真奈美］

※1 即席ラーメンのCMで使われたこの言葉は、男女の役割を固定的にとらえるものとして強い抗議を受け、CMは放送中止となった。
※2 NHK朝の連続ドラマ（2012・9～2013・3放送）。外に出て働くのは純（じゅん・女性）、食事の支度をはじめ家事全般をこなすのは愛（いとし・男性）であった。

座談会 育児休業をとってみたら

―父として子どもの成長を見つめたい

●ゲストスピーカー
名取　謙さん　理学療法士 40代 育児休業期間 3か月
宮本亮平さん　公務員 30代 育児休業期間 2か月
大坂一義さん　公務員 30代 育児休業期間 5か月

●司会　下村美恵子　むさしのヒューマン・ネットワークセンター

これまで、それぞれの職場で実際に育児休業を取得された3名の男性に体験談を語っていただきました。

下村さん　育児休業をとった動機を教えてください。

名取さん　妻が専門職で休みづらく、自分もやってみようと思いました。

大坂さん　両親の助けが得られなかったこと、自分が当時労働組合代表を務めており、妻と同時に育児休業を取れることを知っていたので取りました。

下村さん　育休をとって感じたことを教えてください。

宮本さん　大人と話すと落ち着くので、育児中の気分転換に講座などに参加したかったのですが、お父さん不可のものが多く参加しづらかったです。

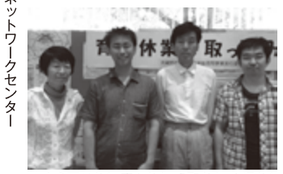
名取さん　お母さんばかりの公園や児童館は行きづらいですが、自分から声をかけていくようにしました。すると男性の自分が入ることでお母さんたちの服装が小奇麗になったり化粧をしてきたりと変化がおこりました。

下村さん　育休をとることで変化はありましたか。

大坂さん　体調を崩していた妻からは共に育児にかかわったことで「3人で幸せになろうね」と感謝されました。

宮本さん　共働きのため「いかに自分たちが楽に育児できるか」という視点だったのが、子どもの事を第一に考えるようになりました。

下村さん　現在の子育て支援はあまりにも母親向けであり、母親が育てるものという認識がまだ根強くあるように思います。今後は制度をより使いやすく整えて育休は男女ともにとるものという意識改革が必要なのではないでしょうか。



左から下村さん、宮本さん、名取さん、大坂さん

報告会 ルーマニアと日本

―男女平等の違い―

●ゲストスピーカー
ルスクツア・ティベリウさん　研修生
山田エリーザさん　武蔵野市在住
樋口ステファナさん　東京都在住

●司会　平井安子さん　「武蔵野プラショフ市民の会」副理事長

1989年の革命をきっかけに民主化が進むルーマニア。「武蔵野プラショフ市民の会」第14期研修生と日本在住の2人の女性による報告です。

平井さん　共産主義から民主主義へ生活はどのように変わったのでしょうか。

山田さん　共産主義の頃の母親は、牛乳やパンを買うために朝5時に起きて1時間は並び、家族を送り出し7時に出勤、子どもを迎えるために4時頃帰宅して家事をしていました。男女ほとんど同じ労働時間にもかかわらず、女性には家事と育児もかかってくる、大変な生活でしたが、男性が家族と関わる時間は日本に比べれば長かったようです。

樋口さん　現在では、子どもが生まれたら育児休暇が取れるようですが、日本と違う点は、男性の意識として、女性は働くもの、と思っているところです。共産主義時代に男女ともに強制的に仕事をさせられていたからでしょう。

ティベリウさん　ちょうど革命の頃に生まれた僕の家では、母が台所仕事をしている間、父は家全体の掃除をしていました。自分も同じようにしたいと思っています。

平井さん　女性の社会進出は進んでいますか？

ティベリウさん　今では管理職や起業している女性もいますし、政治の世界にも進出しています。

平井さん　2007年にEUに加盟しましたね。

ティベリウさん　外国で働くという選択肢が増えました。夫が海外で仕事をして高収入を得るので、残された妻は働く必要がないという専業主婦は2割くらいでしょうか。

樋口さん　男性が海外で働くようになって、家族のあり方が新たな問題となってきているようです。［文　小林美茎］

左からティベリウさん、山田さん、樋口さん

子どもとふれ合うことで、新たな自分を発見

現在、市のすてっぷルームでは、学習サポーター15人が小学2年から中学3年までの子ども達13人をサポートしています。そこで支援活動に参加している3人の学習サポーターから、ボランティアのきっかけや活動によって得たことを伺いました。

すてっぷルーム学習サポーター
小笠原覚子（さとこ）さん　大学3年 20代
岡田謙吾さん　大学3年 30代
森中真佐樹さん　大学4年 30代

――ボランティアのきっかけを教えてください。

森中さん　大学の掲示板で見たのがきっかけです。正直、子どもとかかわることは得意ではなかったけれど、臨床心理学科で子どもの心理を勉強していく上で、実際に子どもとふれ合う活動をしてみたいと思いました。

岡田さん　働いていた会社の倒産を機に、昔から教員になりたかったので社会人入学し、いい機会だと思い応募しました。

小笠原さん　大学生活が落ち着き、勉強とアルバイトの両立よりボランティアと思い、応募しました。実は子どもが苦手だと思っていたけど、やってみて子ども好きになり、新しい自分を知りました。

――ボランティアをする上で心がけていることは。

森中さん　その日その日で、同じ子どもといえども気分が違うので、子どもの気持ちをなるべくキャッチするよう心がけています。

岡田さん　多くの子どもと話してコミュニケーションをとるようにしています。

小笠原さん　長期的に見ていて、勉強に対してネガティブなイメージをもたないよう、まずは子どもとの信頼関係を築くようにしています。やる気のない子に勉強させるためにスタッフ会議で対応策を話し合っています。

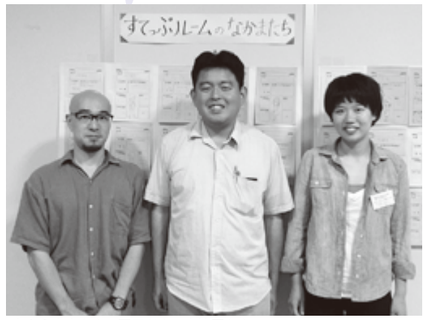
――この活動を通して得たものは。

森中さん　他の先生が教えるのを見るのはとても勉強になります。親や先生が縦、友人が横の関係だとすれば、ここは「斜め」の関係を築けるのもいいです。

岡田さん　多様な子ども達と1対1でふれ合うことができ、貴重な体験をさせてもらっています。

小笠原さん　教育現場だけでなく、社会に出れば、問題を見つけ解決策を考えるという繰り返しのサイクルはどこにでもあり、通用すると思います。子どもから学ぶことも多く、新たな自分を発見しました。

［取材・文　杉田真奈美］



左から森中さん、岡田さん、小笠原さん

●**すてっぷルーム**　帰国・外国人教育相談室（教育支援課）が市内在住または市立小・中学校在籍の帰国生・外国籍および国際結婚家庭の児童対象に、自主学習をサポートしている。

消防団に入団して、日々の暮らしが豊かに

仕事中でも災害時には現場に駆けつけ活動する、地域防災の要「消防団」。昨年、武蔵野市で初めて女性の消防団員が誕生しました。消防団活動を通じての地域社会とのかかわりについてお話を伺いました。

武蔵野市消防団団員
阿曽朝美（ともみ）さん
村野友紀さん
後藤真澄さん

――消防団に入団された動機は何ですか。

阿曽さん　知人に勧められたのです。地元のおみこしを一緒に担ぐ中に分団の人もいたので、その活動内容はだいたい知っていました。

村野さん　仕事で海外に行くことが多かったのですが、その度に住民が居住地域を大切にし活動する姿にふれ、地域社会の重要性を感じていました。地域の中でできることはと考えた時、消防団は男性社会のイメージが強いですが、逆に女性ということをいかしながら活動できるのではないかと思ったのです。

後藤さん　3人の子育てをする中で、私は地域に助けられたという思いが非常に強く、その恩返しができればという思いからです。

――入団後ご自身の状況に変化がありましたか。

阿曽さん　子どもも少年消防団に入り、家でAED（自動体外式除細動器）の練習を人形でしたりと、消防団をキーワードにコミュニケーションが増えました。

後藤さん　訓練を重ねるごとに、何かあった時には「助ける側」になれるのではという気持ちになってきています。子育てがひと段落し、空虚さを感じた時もありましたが、今は自分にもできることがあるんだと、自信になっています。

村野さん　地域の人と接する機会が増え、〝顔見知り〟から〝親しい〟人が増えました。訓練で学んだことが仕事にも役立っており、日々の生活がさらに豊かになったと思います。

――今後どのように活動していきたいですか。

後藤さん　上級救命士の資格を取って、地域防災の自助・共助確立のお手伝いを。そして、「子どもたちが自分たちの手でできる防災」というものを考えていきたいと思います。

村野さん　女性消防団員としてまず、広報活動、学校や地域での啓蒙活動、住宅火災警報機設置の普及などに力を入れていきたいと考えています。［取材・文　矢後麻美］

左から後藤さん、阿曽さん、村野さん

●**消防団員**　生業を持ちながら、災害時には就業中でも出動し、消防署や他の関係機関と連携しながら、消火活動・救助活動等を行う。また、春・秋の火災予防運動や歳末消防特別警戒等の活動も行っている。女性団員募集中。

column vol.7

明るい空気が子どもの力を育てる

近年、夢を持てない子どもたちが増えているのは、自分と周りを比較したり、「無理だ」「現実を見ろ」という大人たちの言葉も原因の一つになっているそうです。企業研修や教育の場で、「夢を叶える力」を引き出している大嶋啓介さんに、人の成長に欠かせないものを伺いました。

人の能力を伸ばすのは一言で言うと「明るい空気」です。実際、業績を伸ばしている会社は、職場が例外なく明るいのです。それは家庭も同じです。子どもの能力を伸ばせるかどうかも、家庭の明るさで決まります。

子どもが夢を持てなくなる一番の瞬間は、親が仕事から帰ってきた時に発する「疲れた」という言葉を聞いた時だそうです。「疲れた＝仕事はつまらない＝じゃあ、大人になりたくない」と思ってしまう。ですから、お子さんのいる方には、無理をしてでも「明るく出かけ、明るく帰る」を実行していただきたいと思います。

言葉は明るさを生み出す大切な要素の一つです。成功者と言われる人たちは、成功しているから明るいのではなく、明るい言葉を使っているから人生がうまくいっています。

実は14年前まで、僕も否定的な言葉ばかり使っていました。「成功している人は自分とは違う」と思い、その結果、リストラにもあいました。でも、ある時、どん底を経験した人の〝明るい言葉を使って人生を変えた話〟を聞いて、「自分も変われるかもしれない」と思ったのです。そして、本当に人生を変えることができました。「可能性のない人はいない」というのが、今の僕の信念です。

てっぺんのメンバーには、親がいない、虐待を受けていた、学校に通っていない―そんな経験のある若者ばかりを採用しています。それは僕が、彼らの可能性を心から信じているからです。

てっぺんで行っている『朝礼』では、自分の夢を発表し、人の話を聞き、互いに応援しあうということをします。すると、その場に「気持ちが明るくなるプラスの要素」が増えていき、やがて自分も他人も認めあうことができるようになります。それが、人の可能性を引き出します。

今では店長の立場で人を育てたり、起業して、夢を叶えているメンバーが大勢います。その姿を見せてもらえるのが、僕にとって最高に嬉しい瞬間です。

学校の授業にこの『朝礼』を取り入れたクラスは、雰囲気が明るくなります。するといじめもなくなります。プラスの空気がある場では、いじめは起こらないのです。

大人の少しの変化が子どもの未来を豊かに伸ばしていきます。大人が明るい場を作りだすことが、今、求められていると感じています。

［取材・文　詩水淳子］

大嶋啓介さん

日本を元気にする居酒屋てっぺん創業者。開店前に行う「公開朝礼」に年間約1万人が見学に訪れる。「朝礼」を教育の場に紹介する他、企業研修、講演会なども行う。著書「夢が叶う　日めくり」（現代書林）など。
HP http://teppen.info/

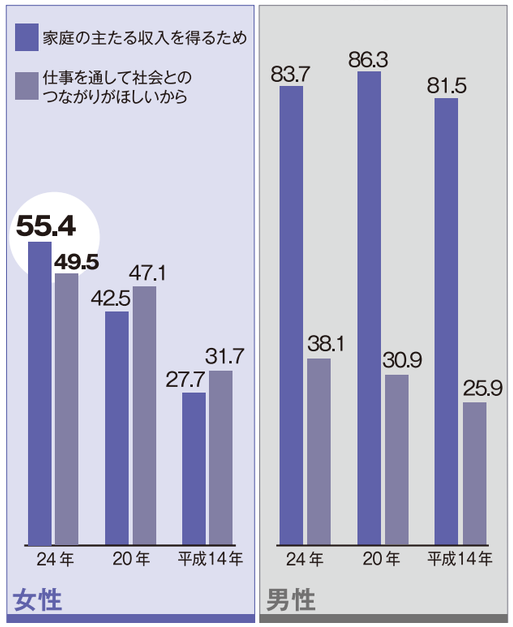
数字で見る男女共同参画　Vol. 7

これって何の数字？

55.4%

「働いている理由」を問われ、「家庭の主たる収入を得るため」と答えた市内女性の割合です。

●働いている理由＜現在働いている人＞（全体、性別：複数回答）【前回比較】



※調査対象者の年齢：平成24年調査は18歳以上、平成20年、平成14年調査は20歳以上
出典：「武蔵野市男女共同参画に関する意識調査報告書」（平成25年3月）より

上記の数字は、平成24年に武蔵野市で実施された「男女共同参画に関する意識調査」における、現在働いている人を対象にした設問で「働いている理由」に「家庭の主たる収入を得るため」と答えた女性の割合です。平成14年、20年、24年と比較すると、14年は3割にも満たないポイントにもかかわらず24年は5割を超え倍増、20年から見ても、10ポイント以上増えています。これは、この10年、長引く不況のもと、市内女性が自分のためだけではなく家庭を支える目的で働き出したとも考えられます。

「働いている理由」において平成14、20年の過去2回に行われた同調査における女性で最も多かった項目は、「仕事を通して社会とのつながりがほしいから」でした。最も新しい24年の調査でも、先の項目に次いでポイントが高いことから、市内女性の仕事を通じた社会とのつながりを意識する気持ちは近年においても変わっていないことがわかります。しかし、その思いを一時棚上げしても、まずは家庭を支えるために働かなければならないという現実があるようです。

今年6月、満を持して放たれた“アベノミクス”第3の矢。その経済効果によって、切なる思いを抱え働く市内女性の気持ちをも救ってくれることを祈るばかりです。

［文　関口直子］

INFORMATION

市民活動推進課　男女共同参画担当から

◉平成25年度 男女共同参画施策予算について

平成25年度市民活動推進課男女共同参画担当の予算は19,386,000円です。内訳は、

①男女共同参画推進委員会費 2,704,000円
武蔵野市第三次男女共同参画計画策定のための検証・検討を行う推進委員会費及び、計画書・概要版作成業務委託費。

②むさしのヒューマン・ネットワークセンターの管理運営費　11,983,000円
武蔵境市政センター2階の市の男女共同参画施策を推進する拠点であるむさしのヒューマン・ネットワークセンターの管理運営費。学習・研修機能、情報提供機能、市民交流・活動支援機能等、重要な役割を担っています。事業委託料、人件費、光熱・電話・回線通信費、複写・印刷機借上料など。

③男女共同参画施策事業費 4,229,000円
男女共同参画情報誌『まなこ』作成、講演会・講座、男女共同参画推進団体活動補助金など。

◉男女共同参画推進団体活動補助金について

男女共同参画推進団体が男女共同参画社会の実現に向けて行った研修・調査・研究等の活動に対し、活動の活性化と市の施策の推進を目的として、経費の一部を補助しています。

補助金の交付は、1団体各年度1回、上限5万円です。申請団体が多数の際や審査結果により、交付されない場合もあります。手続きは市民活動推進課へお問い合わせください。

平成24年度8団体実施（①団体名②内容）
＊①むさしの市女性史の会②女性史の冊子第三号「あの頃 そのとき 国策に絡め捕られて―」作成
＊①HBB(Happy and Boon Buddy)②講演会「メディアに作られた私たち」
＊①NPO法人ウィッシュ・プロジェクト②講演会「思春期の子どもとのコミュニケーション」
＊①ゆう^{3}②子育てママ・パパのためのおカネの話「家計力UPセミナー」
＊①武蔵野ブラショフ女性問題研究会②シンポジウム「ルーマニアの女性は男女共同参画推進のことどう思っていますか？～ルーマニアの女性の立場～」
＊①むさしのスカーレット②トークサロン「アジアの子どもの心をつなぐ―児童文学者として伝えたいこと」
＊①らっこの会 ②ひとり親エンパワーメント企画「ひとり親情報交換会＆親子カウンセリング」
＊①ゆびとま子育て@吉祥寺 ②講演会「夫婦で学ぼう育自ゼミ」(全5回)

＊平成25年度の男女共同参画推進団体登録は現在27団体です

◉平成25年度 市職員採用状況

平成25年度、市職員の新規採用者は24名です。男女比は一般事務職で女性11名、男性9名。一般技術職は女性2名、男性2名。

◉男女共同参画フォーラムを実施しました

6月23日から始まる「男女共同参画週間」に合わせ、市民や各団体で構成する実行委員会とともに、講座や展示などを実施する男女共同参画フォーラムを開催しました。(参照：本誌P2～4)
・記念講演会「わたしらしく暮らす・働く～子育て・就活・キャリア～」(6/29)
・講座『「メディアの中の男女」と批判的につき合うために―メディア・リテラシー論の観点から』(6/28)
・ドキュメンタリー映画「her stories」上映と根来祐監督トーク(6/23)
・座談会「育児休業を取ってみたら―父として子どもの成長を見つめたい―」(6/23)
・報告会「ルーマニアと日本―男女平等の違い―」(6/24)
・社会とかかわる最初の一歩を見つけませんか？『まなこ』ちょこっとトーク(6/28)
・武蔵野市女性史パネル展示・団体活動展示(6/22～29)

◉配偶者暴力防止法の一部改正について

「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律の一部を改正する法律」が平成25年6月26日に成立し、同年7月3日に公布されました。なお、施行日は平成26年1月3日となります。

今回の改正によって、生活の本拠を共にする交際相手からの暴力及びその被害者についても、配偶者からの暴力及びその被害者に準じて、法の適用対象とされることとなります。また、法律名が「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律」に改められます。詳しくは内閣府男女共同参画局のホームページをご覧ください。

市民部市民活動推進課　男女共同参画担当　TEL: 0422(60)1869　FAX: 0422(51)2000　URL: http://www.city.musashino.lg.jp

もしDVにあっているなら…　相談窓口をご案内します

●警視庁総合相談センター
03-3501-0110（祝日・年末年始を除く月～金曜 8：30～17：15）

【配偶者暴力相談支援センター】
●東京ウィメンズプラザ
03-5467-2455（年末年始を除く毎日 9：00～21:00）
●東京都女性相談センター多摩支所
042-522-4232（祝日・年末年始を除く月～金曜 9:00～16:00）
●東京都女性相談センター
03-5261-3110（祝日・年末年始を除く月～金曜 9:00～20:00）

夜間・緊急の場合
●警察（事件発生時）110番
●東京都女性相談センター
03-5261-3911（夜間・休日のみ）

●武蔵野市役所　女性総合相談　専門の女性相談員が対応します。
予約制 第2木・第4火（相談時間50分）予約専用 0422-60-1921
●武蔵野市役所　母子(ひとり親)・女性相談
0422-60-1850（祝日・年末年始を除く月～金曜 9：00～17：00）

『まなこ』レポーターの200字コラム「わたしにとっての社会と暮らし」について思うこと

だれと話しているの？　粟澤のり子●吉祥寺本町

幼稚園児の息子を自転車の後ろに乗せ、二人で大きな声で話しながらゆっくりと走っていた時のこと。前から来た男性に話しかけられました。「ああ、後ろにお子さんがいらっしゃったんですね。よく見えなかったので、独り言かなと思いました」。自分でその姿を想像し、ちょっと恥ずかしくなりましたが、考えてみれば「背中に子どもを背負い、そして前を向いて」というのはいかにも母親らしい姿かもしれないなあと思ったりもしました。

子育て中の母こそ趣味友を！　友野その子●関前

未就園時の娘との蜜月は濃厚で幸せを感じていた。が、春に娘が就園し時間の余裕ができたため、子育てを理由に諦めてきた趣味（外国語学習と合奏）を地域で再開してみた。すると、趣味に打ち込める幸せな時間だけでなく、人生の先輩方から子育てについて助言をもらえるようになった。正直、乳児を育てている期間にこそ必要な出会いだったかも…というわけで、幅広い年代の友人まで得られる趣味、育児奮闘中のママにこそオススメです。

社会人とは？　本木綾子●中町

職業を持ち、それについて語れる人こそが社会人だとずっと思いこんでいた。そのため、妊娠・出産を機に仕事を辞めてから自分が何者であるのかを見失い、社会に顔向けできない気がしていた。しかし、子どもを持つ母としてPTA活動に取り組んだり、住んでいる地域に愛着を持ち社会貢献活動をしていくことで、再び自分も社会の一員であると実感できるようになった。今しかできないことを、思いっきりやりたい。

まなこ
2013 Aug. 88
生き方・いろいろ・ゆたかな人生～男女共同参画fromむさしの『まなこ』第88号
企画・発行：武蔵野市市民部　市民活動推進課　男女共同参画担当　2013年8月発行　〒180-8777 東京都武蔵野市緑町2-2-28 TEL：0422-60-1869（ダイヤル・イン）

『まなこ』は文字通り「眼（まなこ）」。人やまちや文化や地球を、男女共同参画の視点＝「まなこ」で見ていこう！という思いで名付けられました。
1991年創刊以来、市民が企画・編集にかかわっています。

平成25年度『まなこ』サポーター会議
サポーターを紹介します！

■**粟澤のり子**（30代）
『まなこ』にかかわることで、市民としての実感が強く湧いているところです。魅力ある武蔵野市を一年通してより深く知っていきたいです。

■**大場和代**（40代）
現在、5才と0才の子どもの子育て中です。男女関係なく子育てに参加できる社会になるといいなと思っています。

■**片柳純**（60代）
遠い彼方の「男女共同参画事業」に自分がかかわるとは思いませんでした。「働く＝自立する」が当たり前と思ってきましたが、現在はもっと柔軟で、幅広い考え方が必要なようです。

■**坂根恵美子**（60代）
武蔵野市に住んで35年。『まなこ』も知ってはいましたが、今回、サポーターという名前に誘われて参加しました。

■**友野その子**（30代）
市民歴10年の30代。娘が春に就園し余裕ができたため、サポーター登録。2年前まで共働きだったが、現在は夫と役割分担し専業主婦に。

■**室岡満美**（40代）
現代は多様化した時代、いろいろな人生があってあたりまえだと思います。へぇそうなんだーと感じる情報を届けていきたいです。

■**本木綾子**（30代）
大好きな武蔵野市でのびのび生きるために、『まなこ』のサポーター活動を通して見聞を広めたいと思います。風通しのよい世の中に！

■**吉田真紀子**（30代）
武蔵野市での7年は子育て一色の日々。「お母さんは家でゴロゴロできていいね」子どもにそう言われる前に、母も別の顔を持ちたい！

5月23日（木）10:00～12:00
むさしのヒューマン・ネットワークセンター会議室にて

活動補助金事業を紹介します

7月6日（土）ひまわりホールにて市の男女共同参画推進団体HBB（Happy and Boon Buddy）主催で志摩法律事務所の志摩　勇弁護士を講師に「ハラスメントって何？」と題した講演会が開催されました。（参加者15名）

被害者にも加害者にもならないために…ということで多数の裁判事例とその対処法まで幅広い内容で知識が深まりました。今まで漠然としていた「ハラスメント」のことを皆で考えるきっかけになりました。

BOOKS★ 貸し出しています！
むさしのヒューマン・ネットワークセンターの蔵書から

『男女共同参画社会をめざして　地域から変える　女性たちが変える』
財団法人 市川房枝記念会出版部

本書は、14道府県で実施した座談会での記録をまとめたものである。登場した方々の活動は、「男女共同参画社会」の形成に向けて、自発的に時間、資金、気力、体力を持った女性市民による自立した実践活動である。実際に活動されている方々のお話により、地域で繰り広げられる様々な活動が人々の生活を支えているということを実感すると同時に、自分が地域のためにできる活動とはなにかと考えさせられる1冊である。

むさしのヒューマン・ネットワークセンターは、
男女共同参画社会を実現するための推進拠点施設です
武蔵野市境2-10-27 武蔵境市政センター2階　tel・fax 0422(37)3410
E-mail mhnc@tokyo.email.ne.jp　URL http://www.mhnc.jp/

男女共同参画週間とは？

男女が、互いにその人権を尊重しつつ喜びも責任も分かち合い、性別にかかわりなく、その個性と能力を十分に発揮することができる男女共同参画社会の形成に向け、男女共同参画社会基本法（平成11年6月23日法律第78号）の目的及び基本理念に関する国民の理解を深めるため、「男女共同参画週間」が設けられました。毎年6月23日から6月29日までの1週間です。この週間では、地方公共団体、女性団体その他の関係団体の協力の下に、男女共同参画社会の形成の促進を図る各種行事等が全国的に実施されています。様々な取組を通じ、男女共同参画社会基本法の目的や基本理念について理解を深めることを目指しています。

内閣府で募集した平成25年度「男女共同参画週間」キャッチフレーズは、「紅一点じゃ、足りない。」に決まりました。

紅一点じゃ、足りない。

男女共同参画社会とは？

男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会（男女共同参画社会基本法第二条より）

Editors' Notes 編集＊後記

「ルーマニアと日本」報告会を興味深く聴いた。初めは小さなことでも、それぞれができることで社会参加することの大切さを改めて感じた。（小林美菜）

男女共同参画という概念は考えるほど奥が深くて迷い道のようです。みんなの笑顔の手前に何があればいいのか、見つけていきたいと思います。（詩水淳子）

男女共同参画フォーラムはとてもいい企画なのに、まだまだ広く浸透していないのが本当に残念…何かを始めれば、自分の世界が広がるのを実感！（杉田真奈美）

今も昔も、女性は考える間もなく家事・育児に追われてきたのだと改めて気づかされた。時に立ち止り考える時間も必要だと感じた。（関口直子）

育児パパ達の奮闘記を聞き共感してしまった。特定の性しか対象にしてこなかった社会や家庭を誰にも開かれたものとして共に創っていきたい。（丸山麻帆）

人のため、自分のため、どちらにしても"生懸命"ということの素晴らしさを再認識。「私らしく――」というのは、こういうことなのでしょうか。（矢後麻美）

◎綴じ込み返信はがきで、ご意見やご感想をお寄せください。次号は、25年12月中旬発行予定です。

＊ STAFF ＊
サポーター：粟澤のり子　大場和代　片柳 純　坂根恵美子
友野その子　室岡満美　本木綾子　吉田真紀子
取材・編集：小林美菜　詩水淳子　杉田真奈美
関口直子　丸山麻帆　矢後麻美
市男女共同参画担当職員
編集協力：栗原 毅
表紙デザイン：藤原理和
レイアウト：上田ジュンコ
印　　刷：プリンティングイン株式会社
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
『まなこ』は市役所、市政センター、図書館、コミュニティセンター、駅、市内の医療機関、美理容院、大型店舗、金融機関、おふろやさんなど市内の約450か所に置いてあります。バックナンバーをご希望の方は、市民活動推進課男女共同参画担当まで。